

医学中央雑誌にみる看護研究における質的研究の動向

関島香代子・香月富士日・高木 廣文・小林ミチ子
竹村 眞理・兵頭 慶子・西山 悦子

Key Words：看護研究，質的研究，データ解釈法

要旨 近年，最善のケアを患者に提供するために EBN（Evidence-Based Nursing，科学的証拠に基づく看護）が求められている。しかし，臨床看護の現象は量的研究に馴染みにくく，通常のエビデンス水準を高くするのは困難であり，質的研究の必要性が指摘されている。

我が国で行われている看護研究における質的研究の最近10年間の動向を明らかにすることを目的として，過去10年間の「医学中央雑誌」で「看護」領域に分類されている原著の質的研究を検索したところ，297論文を抽出した。

最近5年間の質的研究は265編であり，その直前の5年間での32論文と比べ明らかに増加していた。掲載誌の種類では，最近5年間では，学術雑誌とともに紀要が増えていた。用いているデータ解釈法では，内容分析，KJ法，コード化・カテゴリー化の方法が多く，グラウンデッドセオリー法は1割未満であった。

質的研究においては，研究目的・研究対象に適した調査方法とアプローチ方法を適切に選ぶことが重要であるが，実際の質的研究論文においては，これらの記載が不明確なものが少なかった。質的研究を実施するためには，多様な理論的立場を理解し，各データ解釈方法についての理解を深めることが，極めて重要であることが示唆された。

新大医保紀要8(1)：63—68 2005

I. はじめに

“Evidence Based”という考え方が，急速に広まっている。看護学においても「科学的根拠に基づいた看護実践」として，最善のエビデンス（研究成果）をケアの意志決定の一要素として利用し，患者にとって最善のケアを提供するために，EBN（Evidence-Based Nursing）が求められている。

看護が扱う多くの現象は，ケア対象者やケア自体のさまざまなバックグラウンドの個別性が強く，無作為化臨床試験のような実験研究の厳密な実施は難しい。そのため，AHCPR（Agency for Health Care Policy and Research 米国医療政策研究局）が採用しているエビデンス水準の高い臨床看護研究は難しいと考えら

れている¹⁾。しかし，看護研究では質的研究が適していると，多くの研究者が考えている²⁾。

質的研究は，しばしば量的研究との比較によってその科学性が問われてきたが，心理学や社会学などさまざまな理論を基盤とした古い伝統がある。質的研究の理論的立場には，象徴的相互作用論の個々人の主観的な意味づけを探ろうとしたり，日常のありふれた行為とその産物に関心を向けるもの，構造主義的もしくは精神分析的立場の心理社会的な無意識の過程に注目するものなどがある³⁾。それぞれの立場に基づいて，研究の対象となる現象や出来事を内側から理解し，他との比較や一般化ではなく個別の事例を一貫性をもって再構成し，行為者が経験している現実を構築していく。このことから，研究目的・研究対象に適した方法と理

論を選ぶ³⁾ことが重要とされる。

そこで、我々は質的研究で重要とされる研究目的に応じた適切な研究方法に注目し、近年発表された看護研究は、実際にどのようなデータ解釈法を用いて行われているかを明らかにし、看護研究における質的研究の発展にむけた課題を検討した。

本報告では、最近10年間に我が国で行われている看護研究における質的研究の動向を、用いられているデータ解釈法に注目して検討した。

II. 方 法

1. 資 料

我が国最大の医学文献の抄録誌(収録文献約30万編)である「医学中央雑誌」に登録されている文献のうち、過去10年間(1994年4月～2004年3月)に発刊され、「看護」の領域に分類されている原著論文を対象として検索した(2004年8月)。検索に用いるキーワードは、看護系大学教員が質的研究として認知している項目⁴⁾を採用した。

抽出された文献編数は、キーワード毎に、「質的研究」192編、「グラウンデッド・セオリー法」7編、「内容分析」125編、「KJ法」98編、「ナラティブ」15編、「現象学」29編、「エスノグラフィー」6編、「エスノメソロジー」0編であった。ただし、「半構成的面接／インタビュー」(424編)については、質的研究のデータ収集方法であるとともに量的な研究手法など質的研究以外でも多用される手法のため、「質的研究」において用いられた半構成的面接／インタビューは「質的研究」

の検索で抽出されているものと判断し、検索に用いるキーワードから除いた。

延べ472編の文献が抽出された。その中には、同一の文献が複数のキーワードでの検索で抽出されていた重複例が29編含まれていたため、抽出された文献の実数は443編であった。

質的研究に用いられているデータ解釈法の検討を目的とするため、判別に十分な記載がないと判断される学会抄録(80編)、明らかに質的研究ではない文献(66編)は除外した。その結果、分析対象論文は297編となった。

2. 分類方法

各文献の、掲載誌の種類、発刊時期と質的研究のデータ解釈法について、本論文が入手できなかった場合は、その要旨を用いて分類した。

掲載誌の種類は、学会誌、商業誌、紀要(教育機関、医療機関等)、学会抄録に分類した。ただし、学会抄録は分析対象から除外した。

発刊時期は、検索された文献の最新の発刊時期(2004年3月)を基準として遡り、各年4月から翌年3月までの1年間で区分した。データ解釈法の分類は、フリックの定義³⁾を参考にした。すなわち、文献抽出で採用したキーワードのうち「質的研究」を除く6項目、「コード化／カテゴリー化(コード化、カテゴリー化の一方もしくは両方の記載があるがデータ解釈法が判別できなかったもの)」、「ケーススタディ」、「ライフストーリー」、「その他(記載内容にコード化、カテゴリー化などがなく、データ解釈法の種類の判別ができないも

表1 質的研究が掲載された雑誌の種類別論文数の年次推移

発刊年 ¹⁾	n	%	学会誌		商業誌		紀要	
			n	%	n	%	n	%
全体	297	100.0	140	47.1	40	13.5	117	39.4
1994	7	100.0	6	85.7	0	0.0	1	14.3
1995	4	100.0	1	25.0	2	50.0	1	25.0
1996	0	100.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
1997	8	100.0	2	25.0	5	62.5	1	12.5
1998	13	100.0	7	53.8	2	15.4	4	30.8
1999	16	100.0	8	50.0	1	6.3	7	43.8
2000	26	100.0	12	46.2	3	11.5	11	42.3
2001	58	100.0	33	56.9	9	15.5	16	27.6
2002	95	100.0	39	41.5	9	9.6	47	50.0
2003	70	100.0	32	45.7	9	12.9	29	41.4

1) 発刊年は、その年の4月から翌年3月までで分類した。

表2 用いられたデータ解釈法別論文数の年次推移

発刊年 ¹⁾	内容分析			コード化/ カテゴリー化		KJ 法		GT 法 ²⁾		現象学		ナラティブ		ケーススタディ		エスノグラフィー		ライフヒストリー		その他 ³⁾		記載不十分 ⁴⁾		詳細不明 ⁵⁾	
	n	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
全体	297	50	16.8	44	14.8	42	14.1	25	8.4	23	7.7	8	2.7	7	2.4	5	1.7	3	1.0	19	6.4	11	3.7	60	20.2
1994	7	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	14.3	6	85.7
1995	4	0	0.0	1	25.0	2	50.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	25.0
1996	0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
1997	8	0	0.0	1	12.5	1	12.5	0	0.0	3	37.5	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	3	37.5
1998	13	1	7.7	0	0.0	4	30.8	2	15.4	2	15.4	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4	30.8
1999	16	2	12.5	0	0.0	1	6.3	1	6.3	3	18.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	6.3	0	0.0	8	50.0
2000	26	5	19.2	2	7.7	8	30.8	1	3.8	3	11.5	0	0.0	0	0.0	1	3.8	0	0.0	0	0.0	0	0.0	6	23.1
2001	58	8	13.8	9	15.5	7	12.1	3	5.2	4	6.9	4	6.9	4	6.9	1	1.7	1	1.7	6	10.3	0	0.0	11	19.0
2002	95	21	22.1	13	13.7	8	8.4	12	12.6	4	4.2	4	4.2	1	1.1	1	1.1	1	1.1	8	8.4	7	7.4	15	15.8
2003	70	13	18.6	18	25.7	11	15.7	6	8.6	4	5.7	0	0.0	2	2.9	2	2.9	1	1.4	4	5.7	3	4.3	6	8.6

1) 発刊年は、その年の4月から翌年3月までで分類した。

2) 「GT 法」=グラウンデッドセオリー法

3) 「その他」には、データ解釈法の記載はあるが、何れにも該当しない独自の解釈法が含まれる。

4) 「記載不十分」には、本論文にデータ解釈法に関する記載が全くないあるいはほとんどないため判別不可能だったものが含まれる。

5) 「詳細不明」には、本論文を入手できず、要旨の記載内容からデータ解釈法の判別が困難だったものが含まれる。

の)」に分類した。

III. 結 果

1. 質的研究の論文数の年次推移 (表1)

対象となった論文数は、1994年から1996年では、7編、4編、0編と少なく、1997年8編、1998年13編と若干増加していた。1999年16編に対し、2000年は26編となりほぼ2倍に増加し、それ以降も同様に顕著な増加がみられ、2002年には95編になっていた。

最近5年間では、論文数は265編であり、その直前の5年間での32編と比べると、8倍以上増加していた。しかし、2003年は70編で、2002年の95編と比べ少なかった。

質的研究が掲載されていた雑誌の種類では、1994年は学会誌(7編中6編)が多く、1997年からは大学(短期大学)あるいは病院で刊行する紀要が増えていた。1999年以降は学会誌、紀要、商業誌の何れの掲載数も増加していた。そのうち、学会誌と紀要の掲載論文数は、全体の7～8割を占め、商業誌は約1割であった。

2. データ解釈法別による論文数の年次推移 (表2)

表2に示したように、分析対象となった297編のうち、論文本文が入手できず要旨の記載内容では、データ解釈法の判別が困難だった「詳細不明」が60編(20.2%)あった。また、研究に用いたデータ解釈法に関する記載が全くない、あるいはほとんどないため判別不可能だった「記載不十分」が11編あった。

データ解釈法が判別できた論文全体では、(質的)内容分析50編(16.8%)、KJ法42編(14.1%)、コード化／

カテゴリー化44編(14.8%)が多く、グラウンデッドセオリー法は25編(8.4%)であった。

論文数の顕著な増加がみられ始めた2000年は、内容分析(26編中5編、19.2%)とKJ法(同様に8編、30.8%)、現象学(同様に3編、11.5%)を用いたデータ解釈が行われていた。

2001年には、コード化／カテゴリー化(58編中9編、15.5%)が増え、ナラティブ(同様に4編、6.9%)、ケーススタディ(同様に4編、6.9%)、グラウンデッドセオリー法(同様に3編、5.2%)による、多様なデータ解釈法が用いられていた。

2002年に最も多く用いられているデータ解釈法は、内容分析(95編中21編、22.1%)であり、次いでコード化／カテゴリー化(同様に13編、13.7%)、グラウンデッドセオリー法(同様に12編、12.6%)、KJ法(同様に8編、8.4%)であった。

グラウンデッドセオリー法は、2001年から2002年に、それまで0～3編であったものが、12編へと急増している。また、この方法と同一の手順であると考えられるコード化／カテゴリー化の方法も、2000年までは0～2編だったのが、2001年以降、9編、13編、18編と増加していた。

IV. 考 察

我が国最大の医学文献の抄録誌である「医学中央雑誌」に、過去10年間に登録されている、看護領域の質的研究に分類される原著論文について検討した。その結果、最近5年間とその前の5年間とでは、質的研究

は8倍以上増加していた。また、最近5年間では各年前年比で約2倍に増加していた。

2003年4月～2004年3月までの論文数が、その前年と比べ減少していることに関しては、実数の減少ではなく、論文の発刊時期と医学中央雑誌への収録時期とのずれがあり、まだ未収録の論文があるためであろうと考えられる。

顕著な増加がみられ始めた2000年頃から紀要掲載の論文が増えていた。この時期は、看護学教育を行う4年制大学も増加していることを考えあわせると、看護学研究の研究手法として、質的研究の必要性が認識され、実際に行われるようになってきているものと考えられた。

研究に用いたデータ解釈法は、何れの時期も、(質的)内容分析、KJ法を用いた論文が多かった。これらの方法は、日本人により開発された手法⁵⁾であったり、看護学において長く用いられ質的研究に関する文献で詳しく紹介されている⁶⁾など、手法に関する理解が得られやすいことが、研究で用いられる要因になっているものと考えられる。

我が国の看護学において、質的研究手法の代表的存在と考えられているグラウンデッドセオリー法(Grounded Theory Approach, GT法)は、現時点では研究論文として発表されているものは多くはなかった。この手法は、比較的以前から、象徴的相互作用論を理論的基盤とした研究のための方法論⁷⁾や、その研究手法を用いたモノグラフ⁸⁾が翻訳出版されている。しかし、サンプリング、データ収集、データ解釈、理論的サンプリング、といった一連の独特な手続きがあり、完全に実施するのはそれほど容易ではない。我が国においては、独自に開発された修正版GT法¹⁰⁾が存在するなど、実際の研究に適用するには総合的な理解が必要である。このことが質的研究のアプローチ方法として、GT法を実施する上での障壁となっている可能性が考えられた。

質的研究の信頼性の確保には、研究対象の背景にある特定の理論と研究方法が重要である。質的研究を実施する場合、データとその解釈を明確に分けること、データ収集方法やデータ解釈方法を明確にすることが必要であり³⁾、論文ではそれらを判別できるように、明確に記載する必要がある。今回検討した論文の中には、データ解釈法の記載が不十分なため、データ解釈法の判別が困難な場合が多数あった。これらの論文の中には、質的研究の手法に対する認識が十分でないままに、その手法を使用している可能性も考えられる。この点

から、質的研究の各手法が拠って立つ理論的基盤に対する理解を深め、研究目的に適した手法を用いて、研究を実施できることが必要であると考えられる。

今回の研究では、和文文献の検索に「医学中央雑誌」を用いたが、「質的研究」や「内容分析」で抽出された文献の中には、質的データ解釈方法を行っていないものも少なくなかった。このことから、医学中央雑誌のキーワードでは、質的研究や特定のデータ解釈法が割り当てられているとしても、著者らが論文でキーワードとしているものと、一致していない可能性も考えられた。

今後は、各研究におけるデータ解釈法とともに、研究プロセスで重要なサンプリング法、データ収集法が、研究目的、研究設問に相応しい理論的立場に拠って実施できるように、それらの点から質的研究の実施状況を明らかにする必要がある。さらに、実際のケアに役立つような成果を得るために、質的研究による看護研究はどのように実践すべきかについて、具体的に検討する必要があるものと考えられた。

V. 結 論

「医学中央雑誌」登録論文から看護研究における質的研究の動向をみると、最近5年間に急激な増加がみられた。用いられているデータ解釈法は、内容分析、KJ法が多く、グラウンデッド・セオリー法は、急激に増加しているものの、それほど多くはなかった。ただし、データのコード化/カテゴリー化とのみ記載している論文が、比較的多かった。

質的研究においては、研究目的・研究対象に適した調査方法とアプローチ方法を適切に選ぶことが重要であるが、実際の質的研究論文においては、これらの記載が不明確なものが少なくなかった。質的研究を実施するためには、多様な理論的立場を理解し、各データ解釈方法についての理解を深めることが、極めて重要であることが示唆された。

なお、本研究の一部は、平成16年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)15390660)の援助を得ている。

文 献

- 1) 小山眞理子：Evidence-Based Nursing (EBN) と看護実践, EBNursing, Vol.1, No.1, p.18-22, 2001.
- 2) 高木廣文, 西山悦子：看護系大学のEBNに関する意識調査(1)看護研究とEBNに関する意識, 第62回日本公衆衛生学会総会抄録集, p.195, 2003.
- 3) ウヴェ・フリック：質的研究入門〈人間の科学〉のための方法論, 小田博志, 山本則子, 春日常, 宮地尚子(訳), 春

- 秋社，東京，2002.
- 4) 高木廣文：看護研究のための EBN 指向データ解析システムの開発，平成13年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）研究成果報告書，2003.
 - 5) 川喜田二郎：発想法 創造性開発のために，中公新書，東京，1967.
 - 6) 舟島なをみ：質的研究への挑戦，医学書院，東京，1999.
 - 7) B.G. グレイザー，A.L. ストラウス：データ対話型理論の発見 調査からいかに理論をうみだすか，後藤隆，大出春江，水野節夫（訳），新曜社，東京，1996.
 - 8) A.L. ストラウス，B.G. グレイザー：質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリーの技法と手順，南裕子（監訳），操華子，森岡崇，志自岐康子，竹崎久美子（訳），医学書院，東京，1999.
 - 9) B.G. グレイザー，A.L. ストラウス：死のアウェアネス理論と看護 死の認識と終末期ケア，木下康仁（訳），医学書院，東京，1988.
 - 10) 木下康仁：グラウンデッドセオリーアプローチ 質的実証研究の再生，弘文堂，東京，2000.

Trend of Qualitative Studies on Nursing Researches in Japan

Kayoko SEKIJIMA, Fujika KATSUKI, Hirofumi TAKAGI, Michiko KOBAYASHI,
Mari TAKEMURA, Keiko HYODO, Etsuko NISHIYAMA

School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Niigata University

Key Words : nursing research, qualitative study, qualitative data analysis

Abstract Even though “Evidence Based Nursing” has been focused in nursing practice and nursing research recently, the scientific evidence obtained from the qualitative study must be questionable. However it is thought that the qualitative study must be suitable for the nursing research.

In order to examine the trend of qualitative study of nursing research in Japan, we used the “Igaku-Chuo Zasshi” as the database which is the major database for the medical sciences. Using keywords such as “qualitative study”, “KJ method”, “content analysis”, “phenomenology”, “grounded theory”, and “coding/categorizing method”, we could find 297 articles as qualitative nursing researches published for the last 10 years in the database.

As a result, we could find 265 articles which were qualitative studies in nursing researches for the last 5 years, while we found only 32 articles for the former 5 years. It was suggested that the number of qualitative studies was so rapidly increasing in the last decade.

For the last 5 years, the number of articles published in the bulletins was increasing as well as those in the academic journals.

It was found that many articles used “qualitative content analysis”, “KJ method”, “coding/categorizing methods”, while the number of articles using the Grounded Theory approach was not so many. However, the number of articles using “coding/categorizing methods” was increasing rapidly.

The obtained results strongly suggested that it should be necessary to understand the basis of qualitative theories in order to analyze the qualitative data and also to interpret them appropriately.